

---

# 地獄変人と天国馬鹿

双葉れごと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地獄変人と天国馬鹿

### 【Nコード】

N4680K

### 【作者名】

双葉れごと

### 【あらすじ】

「なあ、天国と地獄なら、地獄に堕ちた方が良い気がしないか？」  
「あ……………」

天国に住んでいるヘッドホンをかぶった男と、地獄に住んでいるサングラス男の会話。

5分で読み切れて軽いお話なので、いかがでしょうか。

「なあ、天国と地獄なら、地獄に堕ちた方が良い気がしないか？」  
「あ……………」

ヘッドホンをつけて全体的に白い服装の若者が、サングラスをかけた同世代の全体的に黒い服装の男に話しかけた。  
男はサングラスで隠れた視線をヘッドホン男に向ける。

「……………どうしてだ？ 天国と地獄なんて比べるまでもない。血の池や針山が好きなら、話は別だが」

「トマトジュースとハリネズミは好きでも嫌いでもねーけど……………」

ヘッドホン男はがちがちとヘッドホンごと頭をかいて軽薄な見た目通りの話し方で答える。

「天国ってさ、ほら、いいイメージあるじゃん」

「……………少なくとも地獄よりかは」

「美女美男の天使が住んでさー、食べ物から住む所まで保障されて苦しいことは何もない、みたいに言われてんだろ」

「そうだな……………」

「だけど、実際はそんなことねーだろ。天使だって不細工な奴もいる。しかもそういう奴に限って香水つけまくったりして臭くてかなわねー」

「だが……………衣食住は保証されているだろう？」

サングラスの言葉をヘッドホンは左手を振って否定する。

「最近天国も不景気でさ、この間のサラリーマン経済危機？ で、

首吊って金持っていないくせに天国に来る奴が多くてさ、住む所なくてゴルゴダの丘にプレハブ建設したくらいなんだぜ」

「……………そう言えば、地獄にも大勢、来たな」

死んだ奴が来る、と言えばそんな場所は二つしかない。二人はそれぞれ死後の世界の住人であったのだ。

ヘッドホン男は天国。サングラス男は地獄。

「それで俺、その責任とらされて給料削減だぜ？　たくさん死んだのは人間の責任なのに。俺、なんもしてないじゃん」

「なんもしてないからじゃないのか……………？」

「けーっ、どうしろってんだ。天国なんていい所、一つもありやしねえ。天国に来る奴が清廉でも、天使が腹黒すぎる。天使小学校でも学級崩壊が起きてるんだぜ。ゲームしたり歩きまわったり、天国の未来はどうなるんだか」

サングラスは、わめくヘッドホンとは違って静かに相手をする。

「地獄だって、最近是不祥事が多くて酷いもんだ……………」

釜ゆで地獄の釜が強度偽装で水漏れして一週間使用不可になった。その次は畜生道の産地偽装で秋田犬をケルベロスと騙して業者が利益を得ていたという話もある」

「それは気付けよ。地獄の番犬と民家の番犬の違いにくらい気付けよ。ギャハハハハ」

サングラスの話がツボにはまったのかケタケタ笑うヘッドホン。それにむっとしたのか男はサングラスの位置を直して抗弁する。

「……………天使だって、似たようなものだろう。この間、熾天使が電車内で手鏡を使い痴漢で捕まったと聞くが」

「ぐっ。あ、あれは示談金で何とかなったらしいから、いいんだよ。マスコミにも気づかれなかったんだから。まあ、天使上層部では痴天使って陰グチ叩かれてるけど」

きまり悪げにするヘッドホンだが、サングラスはいつの間にか脇にあったサイドボードの上にいつの間にかあったグラスの中の液体を飲んでいた。

「そうか………ずずず」

「ああ？ なに飲んでんだ」

「レテ河の純度100%天然水だ………飲んでみるか？」

「ふーん、ずずず」

サングラスから受け取った水を飲むと、ヘッドホンは顔をしかめた。

「………レテ河って三途の川の別称じゃなかったか？」

「………気のせいだ」

さらりと言うサングラスだが、ヘッドホンは何とも言えない表情をしてサイドボードの上の《萌犬ケルちゃん饅頭》という、詳しい描写は避けるがファンシーな絵柄がパッケージに描かれた人形焼きを口にした。

「地獄でもこういうのが流行ってんのか？」

「………地獄、でも？」

サングラスがレテ水のロック入りをカラんと音を立ててサイドボードに置いた。サングラスは人形焼きを左右真っ二つにしてから口の中に放りこんだ。

「最近は規制、規制、で昔に比べて人間界に行けなくなったじゃん。ほら、昔は人間界に行ってソドムとゴモラで火遊びしたりしただろ。でも最近の厳正な審査を受けてパスポート取って、ようやく仕事目的でいけるだけだ。だからここ数十年、直接行かなくても色々なことが分かるネットがブームなんだよ」

「……天国でも、か。地獄では就業中にもネットで時間を潰す輩がいて困る」

「天国なんて規制されまくって仕事減ったから、最近じゃ天使の他に副業やりはじめるやつが多くてゴタついてるんだぜ。時代の流れなのか高学歴エリートでも昔に比べ扱いが悪い、って熾天使達が嘆願書出したほどだぜ」

ヘッドホンが「やってらんね」といいつつ人形焼きの首をもぐ。サングラスも口を挟まず愚痴を聞くので、話しやすいのか他人が聞いたら真っ青になりそうな裏事情を話まくる。

「熾天使のヤツらときたら一人は痴漢で捕まりかけるわ、一人は脱天使して自分探しをするとか言ってる人間界に下るは、一人はアイドル目指すなんて夢見がちなこと言いだして、一人は宗教家に転職するわで、もうてんでこ舞い」

「熾天使って、天使で一番偉いが、それでいいのか………?」

他人事なのに思わず心配になるサングラスだがヘッドホンはケラケラ笑っている。

そんな二人しかない空間に音が鳴り響いた。チャーチャーチャチャチャ。《天国と地獄》の軽快なメロディである。

「んあ？」

それが自分の携帯の着信音だと気づいた男はヘッドホンをタンタ  
ンと叩いて通信モードに切り替える。

「おう、オレオレ。俺だってば、ちょっと事故っちゃって、口座に  
金振り込んでくれる？」

「…………それは電話をかけた側が言うんじゃないのか？」

一昔前の詐欺手法風の返答に気を悪くしたのか、電話越しの相手  
は金切り声をあげた。

サングラスが静かに見守る中、ヘッドホンのスピーカーを手で押  
さえながら男は応答する。

「怒るなよ、冗談だ。天使の悪戯だったの。あーあー、わかった  
わかった！ 仕事に戻ればいいんだろ。死ねブス」

ヘッドホンは「てめーが死ねクソ上司！」とわめく携帯を一方的  
にぎりポケットにしまい、サングラスに別れを告げる。

「秘書がうるせーから仕事しに帰るわ」

「…………俺は、他の所で遊ぶとするか」

「ウゼー、地獄に堕ちろ。」

「じゃあな、闇ちゃん」

「…………昇天してしまえ。」

「仕事さぼるなよ、神やん」

## (後書き)

天国と地獄のイメージが昔っからこんな感じですよ。

天使は残業に悲鳴を上げて、悪魔は有休が消化できずに嘆く。

………なんか価値観が歪んでる気がしなくもない。

『ネコが勇者の異世界召還論』連載中。こちらを読んでみてください。  
い。

くあらずじく

私（ネコ。超賢い）と飼い主（あるじ。超ヘタレ）が異世界に召還  
されてしまった。

ついにあるじも勇者デビューか出世したなあ、と思っていたのだが

【魔法】が使えたのは私で、つまり猫である私が勇者！？

それなりに本格的な異世界召還ファンタジー！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4680k/>

---

地獄変人と天国馬鹿

2010年10月8日22時37分発行